

わが町と源平合戦

根上町の由来

治承四年(一一八〇年)

後白河法皇の第二皇子以仁王は、平家追討の令旨を發した。

これに対して伊豆の源頼朝や木曾の源義仲が応じ、越後の城氏を破り、平家政権に対して在地武士団が反乱を起こした。

源平盛衰記を参考にして「北陸処々合戦事」より、その経緯を考えて見たい

然りしかば、寿永二年五月二日、平家は越前国を打ち従え、長畝城(坂井郡丸岡地内)を發し、平泉寺・最明を先として加賀国に乱入した。

源氏は篠原に城を構えて頑張っていたが、平家の大軍が攻め立てたので、佐見・白江・成合の池を過ぎて安宅の渡しに引き上げて陣を作った。

平家は勝ちに乗じて、暇も与えず攻め立てた。

その軍勢は山川に満ち溢れるような勢いであった。

先陣が安宅に着いたような時分、後陣は黒崎・橋立・追塩・熊坂山や

越前の蓮浦・牛山が原まで連なっている、大軍であった。

それは、平維盛を大将にし、宗徒など一万余騎であった。

一方、源氏方の越中・加賀両国の兵が安宅渡しに馳せ集まり、橋板を三間曳き落とし、城を構え、盾や垣を作つて防戦した。

相手の平家は平盛俊の軍勢が安宅の渡しに押し寄せて見たが、橋の板が無いし、川はとても深くて涉れず、南岸に留まらざるを得ない有様であった。

そのような有様で、源氏と平家の軍勢は睨み合つたまま河を隔てて只遠矢を射るばかりの膠着状態であった。

と盛衰記は語っている。

膠着状態を抜け出そうと、盛俊の子の盛綱を使つて渚をつ調べさせるところ、思つたように浅かったので、「渡され候え」と命令をした。

これを見た源氏の陣営では、平家の軍勢を川の中で立ち往生させよとの命令を出し、双方の激戦が始まった。

平家の先陣が三百余騎が川の中で射殺されて、海の中に流される。

このように十日ばかり梯川挟んで戦つたが、源氏方の林・富樫・足田・倉光の軍勢も、大勢の平家の軍勢に追い立てられて安宅の城を捨てた事になった。

「加賀国の住人、井家二郎範方、十七騎の勢にて、根上の松の程まで返合・返合、十一度まで散々戦いけるが、大勢に取り囲まれて、範方遂に討たれけり」とは、史上有名な「根上松の戦い」の結末である。